米国

金融政策動向（2026年9月FOMC）

インフレ抑制に向け政策金利引き上げ、追加の利上げ幅が今後の焦点

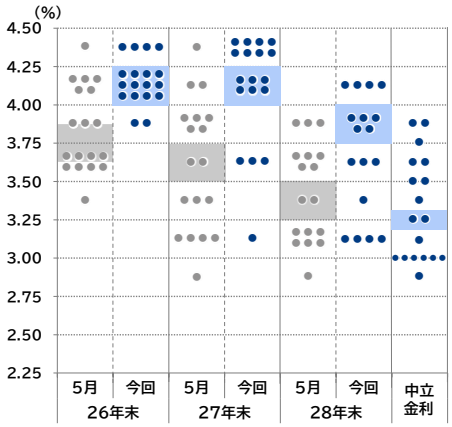
政策・経済センター
江口修平
03-6858-2717

1 経済見通し

		前回（26年6月）	今回
実質GDP成長率（%）	26年	2.2	2.3
	27年	2.3	2.4
	28年	2.2	2.2
	長期	2.0	2.0
失業率（%）	26年	4.3	4.1
	27年	4.3	4.1
	28年	4.2	4.1
	長期	4.2	4.2
コアPCEインフレ率（%）	26年	3.3	3.4
	27年	2.5	2.5
	28年	2.1	2.2
FF金利（%）	26年	3.8	4.1
	27年	3.6	4.1
	28年	3.4	3.9
	長期	3.1	3.2

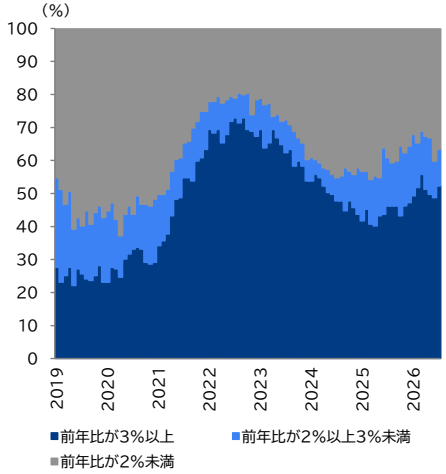
注：FOMC参加者の中央値。実質GDP、インフレ率は各年第4四半期の前年比。上方修正されたものを赤字、下方修正されたものを青字で記載。
出所：FRBを基に三菱総合研究所作成

2 政策金利見通し（ドットチャート）



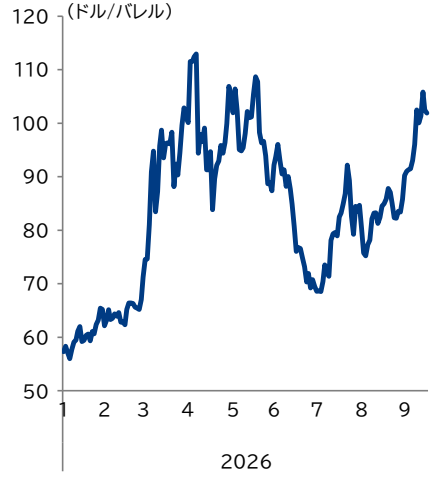
注：ドットは当該水準が政策金利のターゲットとして適切であると考えるFOMC参加者の人数を示す。シャドー部分は中央値。
出所：FRBを基に三菱総合研究所作成

3 コアPCE物価指数構成項目の物価上昇率の分布



注：直近は26年7月。
出所：米商務省を基に三菱総合研究所作成

4 WTI原油先物



注：直近は26年9月17日。期近限月終値。
出所：Macrobondを基に三菱総合研究所作成

評価ポイント

決定事項

- FRBは9月FOMCにて、政策金利の誘導目標を3.75-4.00%に引き上げた。ウォーシュ議長は今回の利上げ理由について、前回会合以降、①米経済の一段の強まり、②インフレ基調の改善が十分でないこと、③地政学情勢の変化、の3点が確認されたことを挙げた。また、現在の金融環境については「引き締め的」とは表現し難いと述べた。景気・雇用が力強さを増す中で、迅速なインフレ抑制を実現するために、金融環境の緩和度合いを調整した形だ。
- また、市場が本会合での利上げを事前に織り込む中で、金利据え置きはFRBのインフレ抑制姿勢への疑念を招き、期待インフレを押し上げるリスクがある。市場からの信認確保という点でも、今回の利上げは一定の効果があったとみられる。
- 経済見通しについて、26年、27年の実質GDP成長率が小幅に上方修正、失業率は26-28年にかけて4.1%に下方修正された（図表1）。景気・雇用の強さを示す一方、26年、28年のコアPCE物価上昇率は小幅に上方修正された。

今後の注目点

- 先行き、追加の利上げ幅が焦点となる。政策金利見通しは全期間を通じて上方修正され、18人の参加者のうち16人が年内に1回以上の追加利上げを想定している（図表2）。現時点では利上げが今回限りにとどまる可能性は低く、今後どの程度まで政策金利を引き上げるかが注目される。
- 基調的なインフレの鈍化ペースが今後の利上げ幅を左右するだろう。ウォーシュ議長は、基調的なインフレが明確かつ十分なペースで2%目標に向かっているかが政策判断の基準と述べている。基調的なインフレ率の動向を見る上で、とりわけ物価上昇の「広がり」が注目される。コアPCEの構成項目別に物価上昇率をみると、前年比+3%以上の項目の割合は25年以降増加傾向にあり、広範な物価上昇圧力はなお根強い（図表3）。
- また、中東混乱の再燃に伴う足元の原油高（図表4）や生産者物価の伸び高止まりも、今後の物価上振れリスクとなる。コスト上昇が波及し、インフレ率が高止まりすれば、追加の利上げ幅を押しあげる要因となろう。

Copyright (C) Mitsubishi Research Institute, Inc.